

「IT時代の実務英語コミュニケーション」(シンポジウム発言要旨)

宮崎修二(経済産業省)

1. ITとは

まず、議論の前提として、ITとは何かについて触れたい。「IT」は「情報通信技術」と訳され、わざわざICT(Information and Communication Technology)と厳密に使われる場合もある。Computerizationのような「情報化の進展」と大容量通信やブロードバンド、移動体通信(携帯電話等)、HDTV(高品位テレビジョン)などに見られる「通信の高度化・多様化」が結合した状況を指す、とする方が正確であろう。その結合体の好例がInternetである。

2. IT化——3つの特徴

こうした性格を持つITが社会・経済活動における比重を高めている状況、つまり「IT化」の一般的な特徴としては、大きく次の3点があげられるだろう。

第一に『直接性』である。InternetやE-mailを使うと、情報が直接目の前にやってくるのがその例である。一方で、こうした直接性は、ユーザーを有無を言わず巻き込む「暴力性」があることにも注意する必要がある。取捨選択能力の涵養が一層重要になる所以である。

第二は、『即時性』である。情報の同時大量移動が可能となり、それが常態となることで、情報をやりとりする者には、即時のコミュニケーションに対応する能力が求められることとなる。組織にとっても、タイムリーな情報公開、広報、PRがますます重要性を帯びることになるだろう。

「IT化」の特徴の第三は、『劇場性』という言葉に集約できよう。そもそも、コンピューターやTVで把握する世界は「Virtual」である。コミュニケーション主体には「演技力」が求められ、客体には「演技」と「本質」とを見抜く力が求められる。

3. 英語コミュニケーションへのIT化の影響——分析の3つのScope

一方、ITに関わる英語コミュニケーションの問題を分析する際には、次の3つのScopeが重要になることを指摘しておきたい。『Media』と『Contents』と『Players(送り手、受け手)』である。ITは『Media』の革命である。この発達に伴い、『Contents』の量と種類は増加し、『送り手、受け手』に対応の変化が求められているのである。しかし、これらの変化はタイム・ラグをもって起こるため、少なくとも、現時点においては、英語コミュニケーションの基本は従来型といえるのではないか。むしろ、nativeが使うような自然な英語能力の基本の習得が重要になっていると考えられるのである。したがって、「IT用英語」というものが出現している、とまでは言い難い状況であると考えられる。

4. マス、個人レベルで見たIT化の影響

そこで、これらIT化の3つの特徴や、IT問題分析の3つのScopeを分析の道具として用い、IT化が、マス、個人のレベルでの実務英語コミュニケーションにどのような影響を与えているのか、その可能性と課題はいかなるものかについて見てみよう。

(1) マスレベルでのIT化の影響

まず、ビジネス分野における影響を考えてみよう。企業活動の実像・虚像を瞬時に世界的な広がりをもって、直接、消費者や社会に周知していく活動が重要になってきている。

商品のPRのみならず、企業自体のイメージを広く知らしめていく上で、企業のHP（ホーム・ページ）が重要になるとともに、内容面でも、user-friendly な使い勝手、native にも理解されやすい内容、といった「わかりやすい」英語コミュニケーション手法が必要となってきた。client の個性に訴求する tailor-made なコミュニケーション手法の必要性が増してくるのである。

企業間取引、貿易取引においても、E-Commerce や貿易決済の電子化が進展するとともに、従来型の通信に代わって E-mail が多用されるなど、IT の活用が進むであろう。こうした傾向は一方で、英語コミュニケーションにおける定型化、陳腐化をもたらす可能性があることにも注意しなければならない。

次に、公的セクターにおける影響を見てみよう。特に、国際関係部署においては、諸外国のカウンターパートとの直接的コミュニケーションが増大するであろう。E-mail や Tele-Conference（電話、TV）の利用は日常的になっている。これに伴って、職員の英語運用能力の涵養が重要な課題になってきている。また、職員のマンパワーや能力では対応しきれない通訳業務や翻訳業務への需要が増大することが予想されるが、逆にこれらの通訳・翻訳が適切になされているかどうかを、人任せにせずにチェックし、コーディネートする、より高次の能力も求められるようになるだろう。

さらに、公的セクターにおいても、情報公開の進展や国際的な説明責任の増大が顕著になりつつある。Website を通じた広報活動、頻繁かつ即時のプレス・リリース、外部からの利用が可能なデータ・ベースの構築等公開情報への簡易なアクセスを確保することが必要になってきている。こうした際、送り手としての英語運用能力を質的にも量的にもレベルアップする必要性が増大していくであろう。

（2）個人レベルでのIT化の影響

それでは、IT 化により、送り手、受け手としての個人は、どのような影響を受けるであろうか。これは、ビジネス、公的セクターに共通の課題として捉えることができる。

まず、E-mail 等の多用が通常のこととなるように、直接的英語コミュニケーション能力を持つことが求められるだろう。しかもそれは特殊な能力ではなく、基本的、常識的な英語運用能力として求められていくだろう。上で述べたように、IT の本質は Media の革命である。この環境変化の中で、送り手、受け手は、コミュニケーションの直接の当事者として振舞うことが求められるが、それには、個々人が国際的な基準から見ても違和感のない英語コミュニケーション能力を有していることが求められるからである。

同時に、IT 時代の送り手、受け手には、英語コミュニケーションにおける、定型化、陳腐化からの脱却が求められるだろう。大量、定型処理はコンピューターに任せ、個々人は個性的で知的な活動へシフトする。つまり、コミュニケーションにおける contents（＝メッセージ内容）を、いかに意味のある、ユニークなものにしていくかが重要になる。英語コミュニケーション能力の向上には、英語それ自体もさることながら、各個人の知的な情報発信力を強めていく努力が求められるわけである。その意味で、IT 化により飛躍的に便利になった情報収集活動（例えば、Internet による Data-Base の活用）は、個人の英語コミュニケーション活動の厚みを増すことに一役買っており、IT 化のプラス効果ともいえよう。逆に、IT をいかに使いこなすが、英語コミュニケーション能力の向上をも左右する状況にあるといえるだろう。

（以上）